

「ご支援をいただいた皆さまへ」

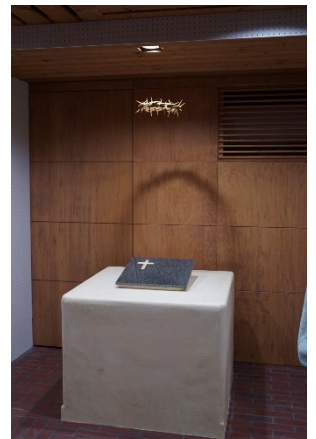
主の御名を賛美いたします。

さて、この度、全国から 1000 名を越える多くの皆様の支えと祈りによって 10 年来の課題でありました新会堂の建築と納骨堂の整備が完了し、11 月 21 日に教区内外の諸教会の皆様、浦河町長、自治会をはじめとする地域の皆様をお迎えして無事に奉献式をすることができましたことを感謝と共に報告をさせていただきます。



戦後の 1956 年に建てられた浦河教会（当時は浦河伝道所）も、遡れば 1886 年 6 月 23 日に「浦河公会」設立（当時は荻伏村、現在の浦河町荻伏にある元浦河教会）のため来道したアメリカン・ボード日本代表 O.H. ギューリック、神戸教会牧師原田助による浦河、西舎地区などにおける伝道集会によって種が蒔かれ、1895 年には「浦河講義所」が設置され、1899 年の「浦河組合基督教会」の設立へとつながります。しかし、1900 年と 1903 年、1908 年の三度にわたる浦河大火で会堂を消失し、復興はあきらめて解散、1912 年元浦河組合基督教会に合併を申し入れ、戦後、浦河町昌平町に伝道所を再建し、伝道を続けてきました。

戦後の高度経済成長の陰で、エネルギーの転換によって産炭地をはじめとする地域の過疎化がすすみ、道内における教会の運営も厳しさを増す中で、1970 年代には浦河教会も例外なく、その議論の対象となったこともありました。そのような中で、浦河教会は 1980 年に共同牧会による祈りと支えによって宮島利光牧師ご一家を招聘し、以来、「地域の悩みを教会の悩みに」を信仰の理念として掲げ、特に精神障害をはじめとして地域の中で重複的な差別の中にいる人たちの現実に向き合うことを大切にする「悩む教会」としての歩みを続けてきました。その中で、1983 年 11 月には宮島美智子姉の協力によって牧師館で昆布の袋詰め作業を開始、1984 年には地域の活動拠点として有志によって旧会堂において「浦河べてるの家」（命名、宮島利光牧師、現在の社会福祉法人浦河べてるの家）を設立して、日高昆布の産直に挑戦し、会社も設立して現在は 100 人程の職員を雇用する事業所として地域福祉の一翼を担っております。新会堂も、地域のアゴラ（広場）として、今後も自助グループをはじめとして、多くの地域の人たちが集う場として、さらには、納骨堂は「共同住居のような納骨堂」をコンセプトに「開かれた納骨堂」として用いられることを願って開設しました。



私たちは、これからも皆様から託された多くの賜物を用いて、「悩む教会」の理念を大切に、「地の塩」として歩んでまいりたいと思いますので、今後とも、祈りの内に加えていただければ幸いです。

感謝

2021年12月20日

日本キリスト教団浦河教会

牧師 五味一

信徒 一同

